

図19 標識放流した台湾ガザミの甲幅組成

ている(表14)。

1985年1月末現在の再捕数と再捕率は、A放流群が1尾で6.7%、B放流群が24尾で28.4%、C放流群が7尾で6.3%、D放流群は再捕なしであった。放流場所不明個体も入れると、今回の放流試験の総再捕数は35尾で全放流数の11.6%であった(表15)。

3 再捕個体の大きさ

A放流群では1尾の再捕があったが、これはこの放流群で最大の甲幅158.6mmのものであった。1才以上のものと当才早期群で構成されるB放流群では、再捕個体の甲幅は140~180mmと大型個体にかたよっており、これらはほとんどが1才以上のカニであった。また当才群で構成されるC放流群では再捕個体の甲幅は100~140mmと大きさに^{of}かたよりはなられなかった(表14、図19)。前述したB放流群の高い再捕率は、1才以上の大型個体が多く再捕されたことによるものである。今のところこれは大きさによる漁獲率の相違のためか、小型個体の脱皮による標識の脱落のためかは不明である。

4 移動

放流した台湾ガザミの多くは、放流海域である平安座島、浜比嘉島、葎地島周辺で再捕されている(図20)。放流地点から再捕地点までの直線距離で移動距離をみると、全再捕数の82.9%にあたる29尾が3km以内で再捕されている(表16)。

しかし、勝連半島を越えて勝連半島南側や中城湾奥の中城沖、西原沖さらには中城湾南端の知名崎沖での再捕例もある。西原沖で再捕されたものは20km以上移動していた。これら中城湾で再捕された

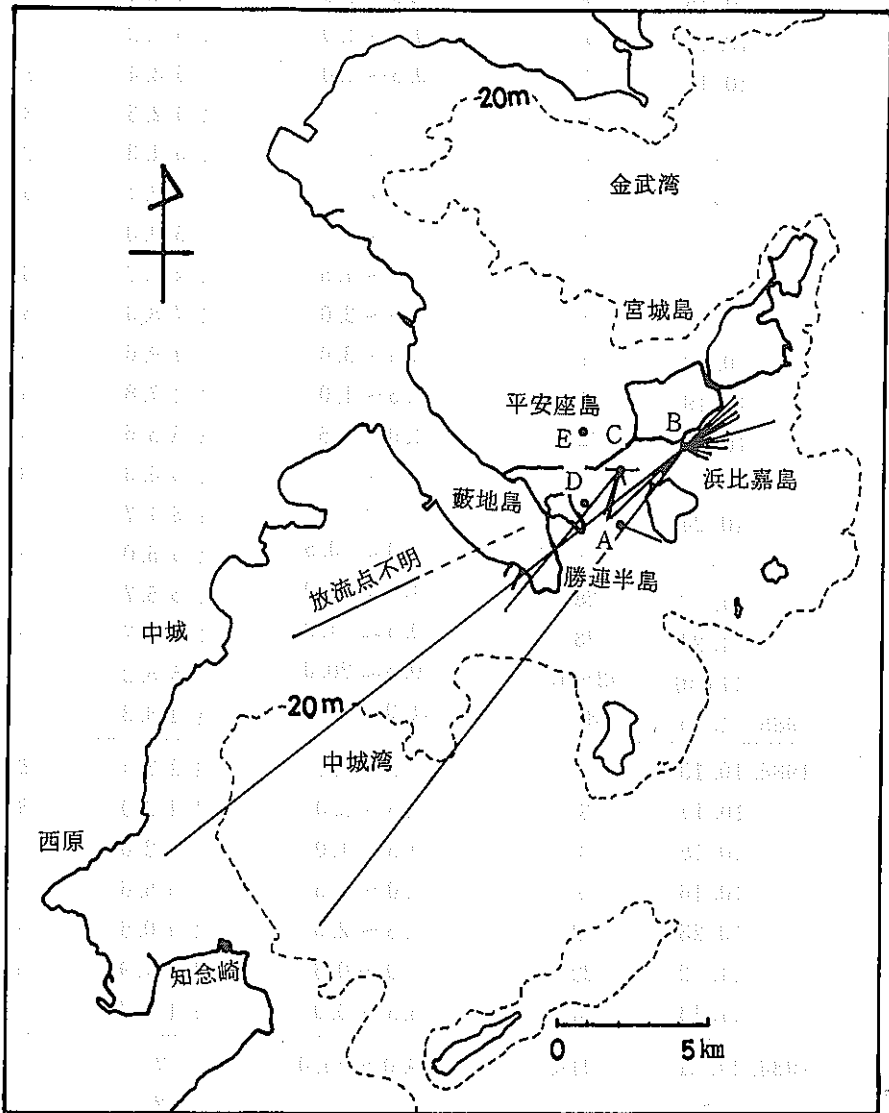
表14 再捕経過

放流場所	再捕日	経過日数	放流地点からの直線距離(km)	甲幅(mm)	性
A	1984. 10. 6	15	1.5~2.0	158.6	♂
	10. 11	1	"	?	?
	10. 13	3	"	168.5	♂
	"	"	"	167.0	♂
	"	"	"	160.5	♀*
	10. 14	4	0.5~1.0	159.0	♂
	"	"	2.0~2.5	163.7	♂
	10. 15	5	2.5~3.0	154.4	♀
	10. 16	6	0.5~1.0	154.2	♀
	10. 17	7	0.5~1.0	153.4	♂
	"	"	"	142.5	♂
	"	"	"	154.3	♂
	"	"	"	142.1	♂
B	"	"	"	153.0	♀*
	"	"	1.0~1.5	143.7	♂
	"	"	1.5~2.0	178.6	♂
	10. 18	8	2.5~3.0	149.6	♂
	10. 19	9	0.5~1.0	147.8	♂
	10. 22	12	1.0~1.5	155.6	♂
	"	"	"	144.3	♂
	10. 24	14	?	161.7	♂
	"	"	0~0.5	156.0	♂
	11. 7	28	1.5~2.0	155.7	♂
	11. 27	48	0.5~1.0	156.7	♂
	11下旬	42~51	19.5~20.0	155.2	♀
	1985. 1. 5	87	21.0~21.5	148.3	♀
	1984. 10. 13	2	0~0.5	137.4	♂
	10. 14	3	1.5~2.0	140.0	♂
	10. 15	4	0.5~1.0	112.0	♀
C	10. 16	5	1.0~1.5	135.6	♀
	10. 23	12	1.5~2.0	100.6	♂
	11. 2	22	0~0.5	131.9	♂
	11. 14	34	5.5~6.0	117.7	♀
?	1984. 11. 21	41<	10.0~14.0	?	?
	"	"	"	?	?

* 抱卵個体

表 15 再 捕 率

放流場所	放流数	再捕数	再捕率(%)
A	15	1	6.7
B	88	25	28.4
C	112	7	6.3
D	86	0	0
不明	-	2	-
計	301	35	11.6



1985年1月末現在

図 20 標識放流個体の再捕地点